長門市 第1分科会

過疎地域自立活性化優良事例発表会

歓迎挨拶

大西 倉雄（おおにし くらお）
長門市長

コーディネーター

宮口 侗廸（みやぐち としみち）
早稲田大学名誉教授・文学博士

過疎地域自立活性化優良事例発表団体

特定非営利活動法人 上士幌（かみしほろ）コンシェルジュ（北海道上士幌町（かみしほろちょう））

NPO法人上士幌コンシェルジュによる都市と農村の交流促進プロジェクト

特定非営利活動法人 ゆうゆうグリーン俵山（たわらやま）（山口県長門（ながと）市）

できる時に、できる人が、できるだけ！
～地域住民が楽しく、誇りを持って住み続けたいと思える地域に～

中和（ちゅうか）地域づくり委員会（岡山県真庭（まにわし）市）

持続可能な地域を目指して始まった「中和いきいきプロジェクト」
～地域資源循環と移住者と地域で織り成す小さな里山資本主義～

まちづくり学校双海人（ふたみんちゅ）（愛媛県伊予（いよし）市）

ふるさとを愛し、たのしく学び、みんなが幸せになる
～地域の担い手を育て、移住者も一緒に幸せづくり～

四国の秘境　山城（やましろ）・大歩危（おおぼけ）妖怪村（徳島県三好（みよし）市）

山里に伝わる妖怪伝説を核にした地域づくり

過疎地域自立活性化優良事例発表会

特定非営利活動法人 上士幌コンシェルジュ（北海道上士幌町）

NPO法人上士幌コンシェルジュによる都市と農村の交流促進プロジェクト

移住者が安心して暮らせる環境を整えるため、移住者が開催する誕生会やフリーマーケットをフォローしたり、仮装盆踊り等に参加することで地元町民と移住者の交流の懸け橋となるような取り組みを行っている。また、商品開発を新たにはじめ、これまでも行っている特産品の販売やふるさと納税特産品の発送により、地域の特産物を活かした都市と農村の交流促進にも積極的に取り組んでいる。

特定非営利活動法人 ゆうゆうグリーン俵山（山口県長門市）

できる時に、できる人が、できるだけ！
～地域住民が楽しく、誇りを持って住み続けたいと思える地域に～

俵山温泉の利用客の減少に起因する地域活力の低下と競争力の弱体化を踏まえ、地域資源である俵山温泉を有効に活用し、NPO法人等を主体に、グリーンツーリズムの推進やお試し暮らしの宿（ゆうゆうの宿）の運営、公共交通空白地の有償運送などの取組を展開する中で、都市農村交流活動や移住定住の動きが活発化し、新たな活力の創出につながっている。

中和地域づくり委員会（岡山県真庭市）

持続可能な地域を目指して始まった「中和いきいきプロジェクト」
～地域資源循環と移住者と地域で織り成す小さな里山資本主義～

地域外に流出していた消費を、地域内の資源を活用することで、地域内で経済を循環させる「薪プロジェクト」、都市部の若者が昔からの暮らしやなりわいを地域に入り地域から学び、持続可能なライフスタイルを模索する「真庭なりわい塾」、庭先で栽培した余った作物を出荷することで、やりがいや生きがいを創出し、出荷者同士のコミュニティ強化を図る「庭先野菜プロジェクト」の３本を柱とした「中和いきいきプロジェクト」を展開し、地域住民も移住者も子どもから高齢者まで、みんながいきいき活躍できる地域を目指している。

まちづくり学校双海人（愛媛県伊予市）

ふるさとを愛し、たのしく学び、みんなが幸せになる
～地域の担い手を育て、移住者も一緒に幸せづくり～

住民らにより結成されたまちづくり学校双海人の毎月の定例会では、様々なテーマのもと、高校生から80歳を越える高齢者が意識を共有する学びの場となっている。特に興味関心の高い福祉・商品開発・イベント・移住については、クラブ活動として継続的に活動している。また、外部からの参加も自由とし、無理のない活動を許容する団体の寛容さが、移住者が地域に根付きやすい気運の醸成に寄与している。

四国の秘境　山城・大歩危妖怪村（徳島県三好市）

山里に伝わる妖怪伝説を核にした地域づくり

平成20年に三好市山城町が世界妖怪協会から「怪遺産」に認定されると、町ぐるみで妖怪をアピールする地域づくりに取り組むようになった。また、徳島、岩手、鳥取の３県で実施している「怪フォーラム」にも、共催者として運営に大きく貢献しており、平成29年の「怪フォーラム」では、1万1千人が会場に訪れるなど、着実に妖怪文化が継承・発展してきている。

現地視察

○ 元乃隅稲成神社

○ センザキッチン

過疎地域自立活性化優良事例発表会

特定非営利法人上士幌コンシェルジュ（北海道上士幌町）
NPO法人上士幌コンシェルジュによる都市と農村の交流促進プロジェクト

特定非営利活動法人ゆうゆうグリーン俵山（山口県長門市）
できる時に、できる人ができるだけ！
～地域住民が楽しく、誇りを持って住み続けたいと思える地域に～

中和地域づくり委員会（岡山県真庭市）
持続可能な地域を目指して始まった「中和いきいきプロジェクト」
～地域資源循環と移住者と地域で織り　成す小さな里山資本主義～

まちづくり学校双海人（愛媛県伊予市）
ふるさとを愛し、たのしく学び、みんなが幸せになる
～地域の担い手を育て、移住者も一緒　に幸せづくり～

四国の秘境　山城・大歩危妖怪村（徳島県三好市）
山里に伝わる妖怪伝説を核にした地域づくり

歓迎挨拶

長門市長
大西　倉雄氏（おおにし　くらお）

皆さん、こんにちは。昨日の全体会、交流会に続きまして分科会、長門市にようこそおいでくださいました。心から歓迎申し上げる次第でございます。

この長門市も過疎の最先端を行っていると言っても過言ではないわけでございまして、私は、以前、県議会議員をやっており、その時に、中山間振興議員連盟を組織して地域に提案をいたしました。それを受けて県は、中山間地域づくり推進室を作りました。そして平成18年に山口県議会として初めてとなります政策条例、中山間地域振興条例を作ったという経緯がありまして、とりわけ過疎などの問題につきましては思い入れがあるわけでございます。

今日、昼から視察に行かれます元乃隅稲成神社等につきましても、過疎地域において、何とか元気を出して行こうと取り組んでいる地域です。経緯を申し上げますと、元乃隅稲成神社での取組は、CNNの日本の最も美しい場所31選に選定されたことが始まりでした。他の選定地域は、中国5県でいうと鳥取の鳥取砂丘。それと宮島の厳島神社。これは誰もご存じですよね。そしてこの長門市の元乃隅稲成神社が入ったのです。それで火がついて、それまで3万人しかいなかった観光客が、昨年度は108万人に増加いたしました。

これまではどこでもありますね。これをいかに地域振興と結びつけていくかということだったのです。いきなり100万人の人が観光に来ましたので、地域住民の方は、道が渋滞してちょっと買い物に行こ

うにも出られないという状況でした。そこで、まず、元乃隅稲成神社に100台止められる駐車場を整備いたしました。その駐車場を有料にし、今年の4月28日にオープンいたしました。9月30日までに約7万台の車においでいただいています。バスは1台1,500円。1日平均10台来ています。そうするとそこだけでもう2千4,500万円のお金が地域に落ちています。

この駐車場の運営は、地元の60戸足らずの漁村集落にお任せしており、駐車場やトイレの管理、道のゴミ拾いなど、すべて集落で取り組んでいただいております。

そうすると、そこの地域がすごく元気になりました。それまでは、漁師ですから、用事がないとすぐパチンコに行っていました。それが、海に出るだけでなく、交通整理をして色が黒くなっており、そして若い人たちが、これなら帰って来たいと言えるかもしれないという元気が出つつある。

そして、売店も作りました。4月28日にオープンして9月末までに1,200万円の売り上げがありました。漁村ですから、ひじきを採って、売店で販売されています。それで4月から売店がオープンするからということで、いつもよりたくさん採られたようですが、これも連休明けには完売したようです。

ここの浜では、だれが、どの区域で、ひじきを採るかについて、組合員が入札をして決めております。この価格について、これまでは500円だったそうです。誰かが買わなくてはいけないから、500円で買っていたのです。これが、3区域か4区域あるそうです。話をすると、今年からは5,000円では落札できないかもしれないとそういった話が出ておりまして、本当に地域の振興というのは、地元にいかに人を呼んで来て、いかにお金が落ちるようにするかということが重要だということを物語っていると思います。

そういう中、今日は全国から、遠くは北海道からもお見えでございまして、こうした過疎の地域の問題をしっかりとお互いが学びあうことの大切さ、長門市の人が若干少ないのが残念ですが、ぜひ実りの多い会になりますことを祈念しております。そしてせっかく長門にお越しいただきましたから、今日は長門の道の駅センザキッチンもご覧いただくことになっておりますが、これについてもひとつぜひしっかり買い物をしていただきたい。また、長門の自然を満喫していただきたいと考えております。

そして、もうひとつ自慢できるのは長門の優しさです。金子みすゞさん、ご存じだと思いますが、金子みすゞさんひとりが優しいのではありません。長門の人みんなが金子みすゞさんと同じような心持ちを持っておりますから、長門の人の優しさにもぜひふれてお帰りいただきたいと思います。

皆さん方の今後ますますのご発展をご祈念申し上げ、全国の過疎地が元気になりますことをご祈念申し上げ、私の挨拶に代えさせていただきます。本日はようこそ長門市にお越しいただきました。あ

過疎地域自立活性化優良事例発表会

コーディネーター

過疎地域自立活性化優良事例表彰委員会　委員長
早稲田大学名誉教授

宮口 侗廸氏（みやぐち　としみち）

1946年富山県生まれ。東京大学大学院博士課程にて社会地理学を専攻し早稲田大学に勤務、1985年教授、その後教育学研究科長、教育・総合科学学術院長を歴任。2017年名誉教授。国土審議会専門委員、大学等設置審議会専門委員、自治大学校講師、富山県景観審議会会長等を歴任。総務省過疎問題懇談会座長として国の過疎政策の議論に参加。地方に住み、公共系の雑誌への寄稿、全国の自治体での講演等で、地方の発展のあり方について発言を続ける。1985年から富山市在住。著書に「新・地域を活かす――地理学者の地域づくり論」（原書房）など。

宮口／はい、おはようございます。今日はよろしくお願いいたします。5団体ありますので時間がけっこう詰まると思います。発表団体にはできるだけ時間を守っていただき、あとの意見交換につなげたいと思っています。

それでは最初に発表を行ってもらいますのは、北海道から来ていただきました特定非営利活動法人上士幌コンシェルジュの川村昌代さんです。それでは川村さん、お願いします。

特定非営利活動法人上士幌コンシェルジュ（北海道上士幌町）

NPO法人上士幌コンシェルジュによる都市と農村の交流促進プロジェクト

川村／皆さんこんにちは。北海道からまいりました上士幌コンシェルジュ、川村昌代と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今日は北海道から山口、初山口でございます。メンバーは前の方にいますが、総勢6名でまいりました。

私たちの取組を簡単にご説明したいと思います。普段、私、よく話すのです。15分でまとめないといけないので、前にいるうちの皆さんも巻きを頼むねということで、時間が過ぎそうになったら巻きの連絡が入るようになっています。できるだけまとめてきちんとお話したいと思っています。

町の紹介については、今回の冊子にも入っていますので、上士幌町のところを開いていただいて、町の場所について、再度確認していただきたいと思います。ひとつご説明すると、上士幌町ってこういう形なのですが、70%が国有林です。言ってしまえば、国が占めている手のつかない場所がたくさんありますので、ここにクマやシカなどの動物がいっぱい住んでいます。

私は、移住定住の仕事をさせてもらっていますが、問い合わせの中で「クマはいますか?」と聞かれます。「います」と答えます。「会えますか?」「あぶなくないですか?」と聞かれるのですが、「そんなに簡単には会えないです。」下の方、私たちが一生懸命住んでいる場所です。特に大自然の中のひとつの場所に住んでいるということで終わらせていただきます。

本題に行きます。上士幌町をご存じいただいている方っていますか?少しいた。ちょっとうれしい。ふるさと納税を頑張らせていただいています。コンシェルジュも、私たちNPOも特産品を発送する業務のお手伝いもさせていただいています。こうした特産品を上士幌町のふるさと納税の返礼品として発送する業務の伝票の作成や、生産者さんと役場さんとのつなぎ役として私たちが存在しております。

ふるさと納税は、本気でやるようになってから売り上げが伸びていまして、平成28年度までしか載せていませんが、平成28年度、5,000人くらいしかいない町でありながら、21億もの寄付をいただいております。これはものすごくありがたいことで、ものすごくお金が入ってきていいことなのですが、作業としてもかなり大変な作業なので、だいたい役場からうちに来る伝票は1日何千件というのが平気で来ているのをヤマトさん、佐川さん、郵便局さんなどの伝票を作成してそれを生産者の皆さんに届けるということをさせていただいています。

役場は役場でその納付書の作成をしなければいけないので、お金は入っていいのかもしれないけど、職員はどこも大変な思いをして、生産者の方もそれに応える何百件という発送をこなさなければいけないのですごく大変ですが、うちの町のいいところというのは役場の職員さんも、トップである町長がそういうことを頑張りなさいと言う方なのですが、それに応える職員、そしてうちのNPO職員もそれを頑張る職員、生産者の人たちもやる気のある皆さんなので、その商品を頑張って、こうしたらもっと売れるんじゃないかという声もすごく出るそうなのです。そこがいいところなのではないかと思います。

で、それらのお金が何に使われているのかというところですが、今いちばん大きいのが子育て支援です。18歳まで医療費無料ですとか、こども園などが無料になっているところで皆さん来られます。

ここがひとつ大きな要因になって、移住されている方も多いのですが、移住する時に、皆さんにとっても同じだと思いますが、子供たちを育てる時に自然環境や、それ以外に教育というところも心配だと思います。

そこで、町としては、このイングリッシュティーチャーですね。英語をきちんと学べるということで、この園に先生に常駐していただくことで、本当の英語を学ぶ機会ができるということをきちんと頭に入れています。その甲斐あって5,000人の町になりました。ずっと人口は下がり気味だったのですが、今回の表彰の要因にもなっているところの、5,000人回復というところで、人口がちょっと戻ってきた、多くなってきたというところで、いろいろな記事にも取り上げられて、町としての状況として出ています。

実際、町とうちのNPOがどう関わっているかというところがお話の筋になってきて、これですね。今回の受賞にあわせてコンシェルジュのメンバー、理事を含めて職員とバイト、関係する皆さんで、ちょっといない人もいますが、みんなで撮りました。

これまで表彰されることがなかったので、理事の顔写真がないとか、私たちの写真がないとかいうことで、役場さんから提供を求められるたびに写真がないので、いちど集合写真というものを撮りましょうということで撮ったのがこの写真です。

私たちの仕事というのは、町が行っていることを民間でできるところは委託しようよという動きの中で、コンシェルジュがふるさと納税の業務と、私が行っている移住定住の業務を請け負うということで、委託業務が中心となって行っています。

ここが私たちの事務所、職員が働いているところですが、観光案内と書かれているところ、これですね、観光案内でもあります。もともと前身で上士幌情報館というところが、商工会さんと役場さん、私NPO職員の3つの団体が上士幌情報館というところで観光案内を行うということで始まった場所でした。別の場所だったのですが、そこから商工会さんが抜け、役場さんが抜け、コンシェルジュだけが人数が増えていく中で、人数も入りきらないし、たくさんの人が来てくれる中で狭かったので、理事が泣きながら貯金して建ててくれたのがこの建物です。

ここで私たちが観光案内業務をしながら、移住を考えている方や町の方や、特産品の販売も行っていますので、ここでお中元お歳暮を発送したいという町の方も訪れてくれています。NPOそのものですが、平成22年に設立されました。実際に活動が始まったのは翌年の平成23年から、私がまずひとりめで入ったのが始まりで、平成23年の3月までは私は役場の臨時職員で、町の役場で、私がやる仕事を受け継いだ時も、役場がやっている仕事を私はずっと見てきました。4月から私が請け負うことになって、平成23年の4月から本格的に活動しています。

普段、情報館には理事はおりません。誰もいなくて私たちだけで活動しているので、皆さんにお話するのですが、私が代表の理事に言われたことなのですが、「何かやらかしたり、問題があったり、謝らなければいけない時に呼べ。それ以外はちゃんとやってくれたらいい」ということで、基本お任せということになっています。だからと言って、いいかげんにやる職員たちではないところが、私たちの素敵なところなのかなと思っていますが、謝りに行かなくていいように、活動としてはきちんと行っているつもりでございます。

NPOそのものがどうしてできたかというところも、上士幌町に関わってくるのですが、町がどうしようか、合併がどうとかという話が出た時に、物と人が交流してつながると素敵なまちができるのでは?ということを考えて、その中でネット販売をすることで町の特産品を本州の人たちに知らしめたらどうだろうということで始まった事業があります。

今、NPOがふるさと納税とあわせてネット事業に関しても発送業務をさせていただいているのですが、そういうことをやろうということで始まっていたのが、NPOが立ちあがるというつながりになっている、そういうことです。ですので、町が元気になるものが、物と人というところの、物がこういうこ

と、人が、北海道全体がやっている移住定住のイベント紹介なのですが、こちらのところで、全国的にも支援センターやいろいろあるかと思います。

上士幌だけではなく北海道全体で自治体さんが今年度80団体が来るそうなのですが、全部で140以上の団体が加盟しているこの組織のフェアがあります。お試し暮らし住宅もこれにあわせて用意されていますが、ここで私は、お試し暮らしに来る、北海道に移住したい、そういう時にすぐに移住するのは難しいだろうから試しに住んでみたら？という住宅をそこの自治体にご用意させていただいて、その住宅のひとつがここです。

これも私が役場の臨時職員だった時に、これができましたという時に、一町民として見に行ったのですが、まさかこれをフォローする立ち位置になるとは、その時には考えていませんでした。

この建物、とても景観がいいので毎年抽選をしなければいけないくらい、たくさん来られます。ただ、私がこの仕事を請けて、役場がやることとNPOが請けて同じことをするなら町がやればいいので、私がするからには何をすればいいのかということを毎年考えていますが、その中で考えて取り組んでいることのお話になってきます。

これは誕生会ということで、もともと移住されている方が夕食を持ち寄って集まっている。そこに私も平成23年3月から入れてもらって、来月からNPOというところに入ってやるようになるから、そういう人がいたら呼んでもいいですかということをお話して、生活体験していく方、移住を考えている方にお声をかけてここで食事会に参加しています。

これだけをやっていることが長くなっていく中で、私は移住者を呼びたいのか何なのかということを悩むようになりました。いる人を大事にすることが、やはり来る人が生まれることにつながるのではないかというところで、移住されている方とお話して、うちの町は小さな町なので、フリーマーケットとか簡単にやっていません。音更町や帯広市まで行くとそういうのが毎月あたりまえに行われているのですが、うちではなかったので、毎月できるようにというところでやり始めました。盆踊りもみんなで、移住された方、町の方、みんなで参加するようにと始めました。

これ以外に、委託以外に私たちがこれから何をしなければいけないか考えて始めたのが学校の購入。「廃校を買い取る」というのを理事がしてくださいました。予算の都合上みんなで改装するということもしたり、畑も、300坪の畑を理事が作ってくださったので、JAさんにもご協力いただいてジャガイモや豆を植えたりして、収穫時期になった時に移住者の方の中にプロのミュージシャンの方がいるのでその方に演奏してもらいながらお披露目会をするということもやりました。

商品開発をこの小学校跡のところでやりたいということがありましたので、そこでお披露目会の時に作ったものの一部を皆さんにこうやって食べていただいたというところです。これからはこれらの商品を具体的に、道の駅に持って行きますのでそこで特産品のひとつになるようなものが私たちの中でも作ることができたらいいねという夢をみんなで語っています。

最後のところで、昨日お話を聞かせてもらって、いつも役場さんは数字を言って、どれだけ移住者が来たと言ったりとか、どれくらいの数字があることを大事にするんですが、私はそういうところに力を入れていなくて、数字は、5,000人だから上士幌町の人が豊かになったかという実感はないのですが、昨日、藤山先生のお話を聞いて、あそこまでこだわって数字が出るということはすごく意味があるということもあるのだなと学びました。

そういう全国の移住担当の人でつながることができればいいなということを感じた昨日からの今日でした。NPOの動きはまだまだいっぱいありますが、またいろいろな機会にお話させていただけたらうれしいと思います。長くなってすみません。ありがとうございました。

宮口／今、最後のあたりで出てきたのは自主事業ですよね。

川村／はい、そうです。

宮口／今回の表彰の理由のひとつに自主事業をやられているということが非常に大きい、価値があると思っています。またあとでお話を聞きます。

川村／はい、ありがとうございます。

宮口／どうもありがとうございました。このあとで単純な質問を受けようかと思っていたのですが、やっぱり時間がなくなりそうなので最後にまとめてということにさせていただきます。今のうちに、この人にこういう質問をしようということは考えておいてください。

では、2番目の事例発表です。山口県はご当地長門市のNPO法人ゆうゆうグリーン俵山の村田保さんから発表していただくのですが、私はたまたま国土交通省のアドバイザー事業で、俵山NPOが立ち上げられる前に、アドバイザーとして1年に3回お邪魔した記憶があります。今回、県から推薦が来て大変嬉しかったです。それでは発表をお願いしたいと思います。「できる時に、できる人が、できるだけ」というキャッチフレーズがついています。それではお願いします。

特定非営利活動法人ゆうゆうグリーン俵山（山口県長門市）

できる時に、できる人が、できるだけ！
～地域住民が楽しく、誇りを持って住み続けたいと思える地域に～

村田／ただいまご紹介にあずかりましたNPO法人ゆうゆうグリーン俵山の村田と申します。よろしくお願いします。事例発表と自己紹介をさせていただくのですが、15分という限られた時間なのでけずりながらお話させていただきます。よろしくお願いいたします。

まず、俵山という地域ですが、ご覧の通り四方を山に囲まれた典型的な中山間地域です。位置的にはこの施設が山を隔てた向こう側という感じなので隣組ではあります。この写真に写っているのは俵山温泉ですが、ここの自治会を中心に周りを農村集落が取り囲むような地形で構成されています。

観光資源は俵山温泉なのですが、この温泉は環境省指定の国民保健温泉で、アルカリ単純泉、温泉番付で西の横綱と位置づけられています。最近では活性水素が多く含まれているということで、けがの回復、若返り、アンチエイジングとして知られるようになっています。加えて神経痛、リューマチに大変よく効くということで古くから、旅館に長期滞在して療養する湯治客が多く訪れるところです。

湯治型で旅館の収容能力も大きいのですが、時代の流れによりまして、医療技術の進歩であるとか、湯治ブームが減ってきたことからお客さんも減りまして、お客さんが減ると温泉街も立ち行かなくなって、40軒以上あった旅館も半分以下、23軒に減っています。温泉街が衰退するに伴いまして俵山全体にもいろいろ影響が出まして、人口が減少していますし、少子高齢化、今高齢化率が50％を超えています。周辺農家は担い手がいなくて耕作放棄地が増えて荒廃が進んでいる状況です。

NPOになった経緯ですが、俵山の公民館で年に1回、地区の全員を対象にして集会を開催していまして、産業や環境などさまざまなテーマの学習会をしていたことで、温泉やスポーツ広場などを結びつけたグリーンツーリズムを活用して地域再生をしようということで、俵山発展促進協議会という俵山では権威といいますか、影響力のある会で確認されまして、その青年部を中心としましてグリーンツーリズム推進協議会を平成16年に立ち上げました。

ちょうどこの年から山口県はグリーンツーリズムに重点を置き、県のグリーンツーリズムモデル地域の指定を受けることになりました。指定を受けたことで県の方からいろいろな支援を受けることができました。

宮口先生のアドバイスで最初に始めたのが平成17年で地域づくりインターン事業、この事業によりまして、都市圏の大学生に来ていただいて2、3週間滞在して、地域のヒアリング調査を通して若い目線から見た俵山への提言をいろいろしてもらうと

いう事業ですが、この事業では民泊に力を入れました。

そこが評価されましたので、平成19年、子ども農山漁村交流プロジェクトモデル地域として、全国10ヶ所のひとつとして、地域指定を受けることになりました。その地域指定を受けたことで、いろいろ環境の整備が整っていきまして、現在でも体験型、社会人や学生の方の農村体験などを積極的に受け入れております。

こうした活動を続けていく中で転機が訪れたのが平成23年で、山口県で国体が開催されました。その時の少年野球の会場が俵山にある多目的交流広場、今スパスタジアムと言っていますが、そこができたことから長門市が全国から集まる選手のために交流拠点施設を作って地元の団体に指定管理を導入すると発表されました。

こちらとしては願ったりかなったりで、それまでは公民館で間借りをして活動していましたので、活動の拠点がほしい。そして、指定管理を受けるためには法人化は避けられないのではないかということで、平成21年に組織を改編してNPO法人ゆうゆうグリーン俵山ということでスタートしました。

活動拠点ができたことによって、それまで難しかったいろいろな事業にも積極的に取り組むようになりまして、そこにあります中では地域版デイサービス、高齢者の支援、お弁当配達、施設への配食サービス、スパスタジアムの指定管理、地域おこし協力隊の受け入れ、旅館も結構空き家が多いので空き家を活用した田舎暮らし体験、ここには書いてありませんが、俵山では中学校も廃校になりましたのでスクールバスの運行も受託しております。

先生の紹介にもありましたが、NPOの活動コンセプトは、「地域住民が楽しく、誇りを持って住み続けたいと思える地域に」をスローガンに、地域コミュニティの再構築につながるさまざまな活動を行っております。「できる時に、できる人が、できるだけ」というのは無理をさせないということで掲げたのですが、結構人数が少ないので、ちょっとできるだけ来てくださいねという形になっています。

主な活動については写真を見ながら説明させていただきます。左上に公民館がありますが、これはNPOの管理ではありません。これが10年前から指定管理を受けたものになります。その下がスパスタジアム、ラグビー場ですが、長門市は来年のラグビーワールドカップの公認キャンプ地になりましたので、写真には写っていませんが、夜間照明などの工事がされています。右上が里山ステーション、私たちNPO団体の拠点施設です。その下が空き旅館を活用したお試し暮らし施設です。

産業に関連しましては、ゆずの加工品。長門ではゆずがいっぱいなっているので、それを加工して販売しています。

右の写真は配食サービスのお弁当づくりの様子です。下の写真は、車両運行、そしてデイサービスで集まっていろいろなことをしています。

これは、配食サービス、高齢者の方へお弁当を配達して、安否確認もするという活動です。これは子供たちを送り迎えするスクールバスです。今はマイクロとワゴン車の2台で運行しています。左は、シャクナゲというのが俵山にはありまして、個人のお宅で山一面咲かせていて、時期になるとかなり多くの人が見に来られます。そのあとの花の整備をお手伝いします。

その下は、県道沿いに桜並木があります。その

手入れをします。その右は高校生の体験学習、そういう感じでやっています。

観光の取組としては、蛍祭り、体験交流施設が

あって、ソバ打ち体験やパン作り、郷土料理づくり、いろいろな体験を用意しています。毎月第4日曜日に朝市を開催していますが、ポイントカードを作ってポイントがたまると景品がもらえるということをやっています。

これは、地域づくりインターン事業、地域を大学生が話を聞きながら回るという事業です。

次に、地域おこし協力隊の関係です。

この方は、初代の隊員です。静岡から移住された方で、奥さんは洋菓子、焼き菓子を作っており、ご主人はコーヒーショップを起業されています。

この方は、二代目の隊員で、今活躍しています。彼はハンターを志していまして、ジビエを通じてのまちづくりに力を入れています。イノシシやシカを獲って、食肉はもちろんですが、皮や角も加工してアクセサリーを作って販売したり、そういう感じで頑張っています。

NPO法人の現状です。会員数は前は300以上あったのですが、今は240程度、こういう紹介を入れております。下の方は、過去数年分の事業収入、事業支出ですが、結構安定した感じでやっております。

早口でわかりにくかったと思いますが、ありがとうございました。

宮口／いろいろな事業をしていらっしゃる。今、予算が4,000万円くらいなんですね。上士幌は総予算はいくらくらいですか？

川村／私はお金の方はまったく理解していないので・・・。

宮口／はい。この俵山の場合は、たまたまアドバイザーとしてお邪魔し、インターン事業をやってみたらということで、取組を始められ、今もそれを続けてもらっているわけですね。

それから子ども農村漁村交流プロジェクトというのを、ある時期、総務省と文科省、農水省の3省で立ち上げ、全国の小学生を農村に3泊泊めようということを決めました。俵山がモデル地域になり、大変素晴らしいと思っております。

それと、NPOになって、いろいろな委託事業を引き受けられるようになってこれだけの予算規模になったということですね。非常にうまくやっておられるという印象ですね。どうもありがとうございました。

続いて岡山県真庭市の中和地域づくり委員会の大美さんからお願いしたいと思います。中和地域づくり委員会は真庭市が広域合併をされた時に、9町村単位で設置された組織ですが、特に中和地域は活動が盛んであると受けとめています。それではお願いします。

中和地域づくり委員会（岡山県真庭市）

持続可能な地域を目指して始まった「中和いきいきプロジェクト」～地域資源循環と移住者と地域で織り成す小さな里山資本主義～

大美／岡山県真庭市の中和地域で、中和地域づくり委員会の代表をさせていただいています大美と申します。よろしくお願いいたします。

先ほどからNPOが中心となった活動が紹介されていますが、私どもの事例というのがまさに小さな地域で、その小さな村づくりについて聞いていただけたらと思います。

早速紹介させていただきます。持続可能な地域を目指して、小さな村のチャレンジということで活動を続けてきました。これが航空写真です。岡山県の最北端に位置していまして、鳥取県と県境を接しています。この白い点線、稜線の下側が中和地区です。このように比較的なだらかなのですが、全域の約85%が山林です。ここが蒜山や大山、日本海という地形になります。

余談になるかもしれませんが、地域のこれまでの取組、過去、現在、前へという流れの中でどういう地域なのかをご紹介します。

146年前の1872年、明治5年、中和地域の人口は772人でした。明治になって初めて戸籍調査が行われた時の日本の総人口が3,300万人余りです。そし

て明治の大合併によって中和という村が誕生いたします。大正時代になると1,300人を越える時期が続きます。

それから一気に戦後になりますが、1960年、58年前、1,700人まで人口が増えます。これは戦後の特殊な状況もあったと思いますが、この時期をピークに人々の暮らし方も大きく変化していきます。たとえば、これは昭和27年の写真です。田んぼを牛でこうやって耕していましたが、耕運機で耕すように変化しました。こういう変化が生まれてきたというのがまちが変わっていったということだと思います。その後の日本は、高度経済成長期に入っていきます。実に、この20年間で人口が35%増えます。

そして、昭和50年代、地方の時代といわれた時代がやってきます。ある意味、まだまだ元気を出すぞという時代ではなかったかと思います。と同時に地域住民の盛り上がりもいろいろ揺れました。一村一品運動とかいろいろなことが起こりました。

ところが平成の時代になってどんどん後退します。これで一挙に株価が暴落し、バブルが崩壊していきます。そこで自主自立への道を歩み始めます。

ところが、今度は平成の大合併が始まります。平成の大合併によって、今から12年前、9町村が合併して真庭市が誕生します。その時のいちばん小さな村が中和村という村でした。その後、人口がどんどん減り続けて、現在は610人という状況です。

そうした中で、地域が何となく元気がなかったように思います。もうどうしようもないのかなというあきらめ的なものもありました。そんな中、5年前に、真庭市とNPOから、小さな里山資本主義の実践を通した地域づくりに取り組んでみませんかという提案がありました。それはありがたいですということで、再チャレンジが始まるわけです。合併後の再チャレンジです。

そして、合併の時に町村の課題を取り次いで、地域づくり委員会によって地域で考えて市に提案できますという仕組みができました。

旧中和村においてもその組織が誕生しました。13の自治会と12の各種団体が参加して、まさにオール中和の地域づくりを考える委員会となっています。

そして、全世帯に地域づくりに対してどのような考えでいるのか、アンケートを取りました。その結果にちょっと驚きました。約8割の方がこれからの地域づくりについてできることは協力したいという内容でした。これはすごいなと、うれしかったです。これがすべてのスタートになりました。

その後、中和いきいきプロジェクトという、地域づくりの取組を始めることになります。

まず最初に取り組んだのが薪プロジェクトです。市営の温泉宿泊施設があります。そこの灯油ボイラーを薪に替えようというものです。そのためには地域から薪を安定的に供給しなければいけません。市から出たものを乾燥し、割って安定供給しなければなりません。これには3者の連携が必要で、その3者の中のあいだに立つ組織を作らなければいけませんでした。その時、ひとりの若者が「私がやりましょう」と、一般社団法人を起こしました。そして地域の中から、薪生産組合の中から14名が参加し、協定を結んで今でも安定的に薪を供給しています。事業規模としては非常に小さいものですが、これがひとつの地域づくりのきっかけで、やればできる、あるいはできるかもしれない。小さな成功体験だったのです。

そんなことを背景に、移住定住対策の話が出てきます。地域の現状はどうなのか、将来はどうなのか。小学校がひとつありますが、人口がどんどん減る中で、15年後には10人を切るだろうという推計が出ていました。ところが、毎年1世帯か2世帯の若い世帯がUターンIターンしてくると、だいたい20人くらいで小学校児童数が安定すると推計で出ていました。これをぜひ達成したいということで取り組んでいます。また、地域で何かできることもあるはずだということで、みんなで話し合いました。活性化とか元気がよくなるとか、よく言いますが、具体的にはどうなるかをみんなで話したことがひとつの地域づくりのきっかけだと思います。

そして話し合いの内容などは地域の皆さんにお知らせをしていきました。中和地域づくり委員会大